

あけのほし 2016 年 4 月

「本当の愛とは何か？」

菊田行佳

「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。…信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

(I コリント 13 章 4-8、13 節)

愛にはいろいろな種類のものがあります。私も、結婚を申し込むとき、確か「あなたを愛しています」というようなことを、言ったと思います。ただ、その時のことを詳しくは覚えていませんので、いったい自分は結婚相手をどのように愛していたのか、そしてどのように愛そうとしていたのかははっきりしません。覚えているのは、きっとこの人と結婚することが出来たら、自分は幸せになれるだろうと考えていたことです。

誰かを愛するということは、やはりそのことによって、自分にとって益となることがあるからだと思います。自分のことを顧みず、ただ相手の幸せだけを願うというようなことはあまりないでしょう。冒頭の聖書の言葉の中にも、「愛がなければわたしに何の益もない」と言っているように、やはり、自分のために人を愛することは、すべての愛の出発点であるものと思われまます。

ただ、この聖書の言葉の中で続く箇所では、愛とは「自分の利益を求めない」ものだとも言っています。この一見矛盾する聖書の言葉を、私たちはどのように理解すれば良いのでしょうか。そのことを考える上である夫婦の例を挙げたいと思います。

■ 愛は支配ではない

万智（まち）さんは、ある業界のトップセールスとして成功している女性でした。努力を重ね、成功の階段を着実に上り、自らの記録を塗り替えてきました。万智さんは結果が数字となって表れるこの仕事が合っていました。成果が上がれば上から評価され、地位も報酬も上がりました。

ところが一つ、万智さんにも、思うようにいかないものがありました。それは結婚生活です。万智さんは持ち前の管理能力を発揮して、しっかり夫のすべてを管理し、すべてを仕切るようになっていました。万智さんは女王のように顔色一つで夫を操り、夫は遠隔操作されたロボットのように動くのですが、それでも万智さんにとっては腹立たしく思えるのでした。右に動くように操っておいて、左に行かなかったというようなことで、最後はしかりつけるようになっていました。

そんな時、夫が隠れて借金をしていることが発覚しました。夫はもっともらしい弁解をしましたが、理由など関係ありませんでした。万智さんの知らないところで、コントロールできないことがあるということが、あってはならないことだったのです。万智さんは別居を宣言し、子どもを連れて家を出ました。夫は抵抗しましたが、万智さんの意思には、結局逆らえませんでした。

夫と別々に暮らすようになると、自分が今まであれほど不自由と苦痛に耐えながら暮らしていたことが、信じられませんでした。仕事を完璧にやりこなし、母親としても立派にその責任を果たしました。そのどちらも、万智さんが思い通りに管理し、努力しただけの成果を出すことが出来ました。

いや、そう思っていました。

しかし、その見込みが狂うことが起きました。別居して迎えた翌年の夏休み、中学生の娘が、夜遊びをするようになったのです。朝まで家に戻ってこないこともありました。戻ってきた娘をこっぴどく叱ると、「ママは全部自分の思い通りにしたいだけじゃない。それなら、一人で暮らせばいい」と捨て台詞を吐いて、また飛び出してしまいました。

気が進まなかったものの、夫に連絡をとって事情を話しました。そして涙ながらに、あの子の面倒を見るのは、私には無理だと言いました。娘もまた、万智さんにとって、コントロールの利かない存在になっていたのです。

どこで何を間違えたのか、それが知りたくて万智さんはカウンセリングを受けるようになりました。そこで指摘されたのは、万智さんが、すべてを思い通りにコントロールしようとし、それが出来ない相手に対しては、激しい怒りを覚え、攻撃するか排除しようとするということだった。それは、まさに娘が自分に言ったことでした。

万智さんは、カウンセラーの指摘を全部素直に受け入れることはなかなか出来ませんでした。それでも娘との関係が破綻していたことは事実でしたので、徐々にではあります。自分中心にしか動けないことを受け入れて行きました。

万智さんのコミュニケーションは、事細かに指示を出して命令する一方的なものでしたが、相手の話を聞き、気持ちを共有することの大切さに気がつき始めました。本当に必要なことは、どちらかが主導権をとって事態をコントロールすることではなく、気持ちを合わせて協力することなのでした。今まで自分がしてきた話し合いは、いつも自分の主張を相手に認めさせるものだったということに気がついて、相手の思いを受け入れることが、実はとても気持ちの良いことなのだと思うようになりました。

いつしか、夫もいっしょにカウンセリングを受けるようになり、夫婦が一緒にいると、娘がとても嬉しそうにするので、素直な気持ちでそのことを受け止めるようになりました。

ある日、夫に、「帰ってもいい？」と聞くと、夫は顔をくしゃくしゃにして、「もちろんだよ」と答えました。（岡田尊司著「夫婦という病」河出書房新社を参照）

誰かを愛するのは、自分が、あるいは自分も、幸せになるためです。ただ、急がば回れで、自分の思いを満たすことよりも、相手の幸せを願って行動した方が、結局、自分も幸

せになれるということなのだと思います。周りを思い通りにすることでは、決して幸せにはなれない。周りも幸せでないと、私も幸せになれない。これが、聖書のいいたいことだと思います。